

わが社の経営戦略

齋藤木材工業株式会社

(上小木材協同組合・組合員)



Vol.35

独自のハイグレード集成材・信州「唐松丸」を展開。信州の木を未来へ。「技術と人」で支える、創業160年の挑戦。



県産カラマツ構造用集成材に特化

「原材料(長野県産カラマツ)をできるだけ高く買い、そこにより高い付加価値を付けて売ることに挑戦しています。それは、森林資源に適正な価値を付けることで、森を健全に保ち次世代に繋げるためです」。



巨大な格子状の梁と柱(耐火集成材)が特徴的な水戸市民会館

そう力を込めるのは、1862(文久2)年創業の齋藤木材工業の齋藤健社長。長野県産カラマツに特化した構造用集成材の開発・製造および建築設計・施工で、県内外はもとより海外でも高い実績を誇る同社の8代目です。「技術でつなぐ木の未来」を掲げ、地域材の可能性を広げる挑戦を続けています。

1972(昭和47)年、創業以来の酒・醤油・味噌などの樽の製造・販売から、木材の板を繊維方向に平行に積み重ねて集成接着する集成材事業に転換。国内外のさまざまな樹種を使い、住宅の階段材、壁板、カウンターなどの造作用集成材を製造してきました。

その後、大型集成材の住宅への使用が可能になったのを受け、大断面集成材専門工場(ナガト工場)を建設。1989(平成元)年、建物の柱や梁、桁の材料として使用される構造用集成材の開発・製造にシフトし、「やまびこドーム」(松本市)をはじめとする大型木構造建築物の設計・施工も手がけるように。同社製品を使った建築物は「水戸市民会館」などの行政施設から学校、スポーツ施設、商業ビルまで全国に広がっています。

経営理念は「人 技 繋」。人、技術の積み重ねと、木材資源を次世代につなぐことを柱とし、技術開発と設備投資を積極的に行っています。

1994(平成6)年にCAD/CAMによる大断面NC加工機を導入し、製材から加工、仕上げまで高品質化とともに省力化を推進。耐火集成材の研究開発・製造にも力を入れ、燃え止まり型集成材は日本初の4階建て木造商業ビル(神奈川・横浜)に採用され、さらに需要が拡大しています。

2024(令和6)年には、和田工場の新設、5軸加工機、幅90~1,300ミリ・厚さ15~300ミリの加工に対応する超大断面6軸切削機「モルダー」の導入など生産体制を大幅に強化。特にモルダーは齋藤社長が「より多様な

製品づくりに合わせてメーカーと一緒に開発した」と話す完全オリジナルモデルです。

信州「唐松丸」としてブランド化

原材料を高く買って、より高い付加価値をつけて売る。これは森への還元を意識した企業戦略です。齋藤社長がそう話す戦略のひとつが、厳選した高価な信州カラマツ材を使ったハイグレード集成材、信州「唐松丸」のブランド化です。



ハイグレード集成材、信州「唐松丸」

ハウスメーカー、工務店、設計事務所など住宅産業に積極的に製品をアピール。持続可能な森林資源の育成や、CO₂問題などの環境意識をより高めてもらう取り組みもあわせて積極的に行っています。

構造用集成材に利用するのは丸太の約60%。残りの端材はチップ化して販売したり、木の皮や木屑などは人工乾燥機の燃料として活用しています(化石燃料不使用)。

同社では脱チップを掲げ、より付加価値の高い商品の開発を推進。「信州産カラマツ薪」をはじめ、公共施設でのベンチ、ドーム形状サウナなどを商品化しています。

「今一番力を入れているのは人材づくり。社員一人ひとりが、自らの技術が地域や未来に繋がっていると実感できる環境づくりを目指しています」と齋藤社長。そしてこう続けます。「技術は機械化・DX化を進める一方で人は重要だし、会社のイメージアップのため発信力を強化していくことも大事。



齋藤健代表取締役社長と広報担当の畔地菜津美さん

移住者用に社員寮を充実するなど働きやすい職場環境づくりを進め、そこから技術を磨き、人と地域を繋ぐことで、木の未来を支えていくことが私たちの使命です」。

代表取締役社長 齋藤 健
設立 1957(昭和32)年6月
資本金 5,000万円
従業員数 84名(男性70名、女性14名)
本社 小県郡長和町古町4294
TEL: 0268-68-3535 FAX: 0268-68-0202
事業内容 構造用集成材の製造・加工・建築、木造建築物の構造設計など